狐のお面

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狐のお面

【Ｎコード】
Ｎ５４１９Ｎ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
狐に油揚げをあげたお礼に何でも化けられる狐のお面を貰った源五郎。ところがもう一つお面を欲しいと言います。その理由は。夫婦のお話です。

第一章

狐のお面

昔々紀伊の国に源五郎という男がいました。
油揚げが大好きでとにかくいつも食べていました。その彼がいつもの様に油揚げを買ってそのうえでほくほくとして家に帰っているとです。不意に道の端から声が聞こえてきました。
「もし」
「んっ？何だい？」
その声がした方を見るとです。そこにいたのはです。
狐でした。大きな尻尾に赤毛の狐です。その狐の声でした。
「油揚げを持っておられますね」
「そうだけれどそれがどうしたんだい？」
「しかもとても美味しそうですね」
こう源五郎に言うのです。
「匂いが普通の油揚げとは違います」
「おお、それがわかるんだね」
「はい、狐ですので」
狐は油揚げが大好物です。源五郎と同じです。
そしてです。さらに言うのです。
「ですから」
「そうか。それであんたはこの油揚げを食べたいんだね」
「お一つ。宜しいでしょうか」
こう源五郎に対して言いました。
「貴方様さえよかったら」
「いやいや、それは駄目だ」
しかしです。源五郎は笑ってこう狐に返します。
「そんなことは駄目だ、絶対にだ」
「左様ですか。やはりそうですね」

狐は彼のその言葉を受けてです。残念そうな顔で言うのでした。
「図々しいことを言って申し訳ありません」
「一つだなんてとんでもない」
ところがです。ここで源五郎の言葉が変わりました。そして次の言葉は。
「この油揚げ全部あげるさ」
「えっ、まさか」
「そのまさかだよ。ほら、出て来るんだよ」
こう言うとです。その狐の周りに小さな狐達が何匹も出て来たのです。源五郎はその小さな狐達も見てそのうえでにこりと笑って言うのでした。
「子供達だよな」
「はい、そうです」
狐は正直に答えました。
「実は妻もいます」
そしてもう一匹出て来ました。今度は見事な黄色い毛の狐です。源五郎の周りに忽ちのうちに多くの狐達が出て来て囲んできたのである。
「妻です」
「はじめまして」
「狐にはじめましてって言われたのははじめてだな」
何気にそのことも思う源五郎でした。
「まあとにかくだよ」
「はい、とにかくですか」
「一個でそれだけの数だととても足りないだろ」
狐達を見回しながらの言葉です。
「そうだろ？やっぱり」
「それはその」
「分けますので」
「全部あげるさ」

源五郎はにこりと笑って言いました。
「全部な。あげるからさ」
「えっ、全部ですか」
「その油揚げを全部ですか」
「ああ、持って行くといいさ」
笑顔をそのままにしての言葉でした。
「それで家族全員で食べるといいさ」
「しかしそれは」
「貴方が買われたものですし」
「今更何言ってるんだよ。丁度金もあるし油揚げはまた買えばいいさ」
こう狐達に言うのでした。
「だからな。全部持って行けよ」
「あのですね」
赤毛の父親狐がおずおずと源五郎に対して言います。
「一個でいいのですが、本当に」
「だから子供がそんなにいたら足りないだろ、遠慮するなって」
「だからですか」
「ああ、いいから全部やるよ」
「本当にですか」
父親狐は驚いた顔で源五郎にまた尋ねます。

第二章

「本当に」
「そうだよ。男に二言はないさ」
「何とまあ」
ここまで聞いてです。あらためて驚いた顔になる父親狐でした。
そして母親狐もです。夫と同じく驚いた顔でいました。
その顔で、です。こう言うのでした。
「有り難うございます」
「御礼もいいさ」
源五郎は母親狐に対しても言うのでした。
「そんなものはさ」
「いいのですか」
「遠慮せず貰っておけよ」
また言うのでした。
「いいな、家族皆で食べな」
「はい、わかりました」
「それじゃあ」
二匹もそれに頷きます。そうしてです。
そのままです。源五郎からその油揚げを満面の笑みで受け取ります。子狐達も明るい笑顔で口々に言います。
「じゃあお父ちゃんお母ちゃん」
「すぐに食べよう」
「油揚げ食べよう」
その笑顔での言葉です。
「皆で食べようよ」
「あたしもうお腹ぺこぺこだよ」
「人間さん、どうも有り難う」
「美味いものはあれだよ」

源五郎はその子狐達に対しても言いました。今度は優しい笑顔になっています。
「皆で食べないとな。人だけが独占ってのもよくないさ」
「それでなのですが」
油揚げの包みを持っている父親狐がです。こうも言ってきました。
「今夜楽しみにしておいて下さい」
「今夜かい？」
「御礼はいいと仰いましたがそういう訳にはいきませんので」
嬉しい笑顔の中にも真面目なものがあります。
「ですから。今夜楽しみにしておいて下さい」
「どうやら断ってもだな」
「そちらも御好意を見せてくれましたし」
「今度はそっちってことかい」
「はい、狐にも仁義はありますので」
父親狐はそういうことはわきまえている狐の様です。人間でも中にはそうしたものを欠片も持っていない人がいたりするというのにです。
それに基づいてです。こう言うのでした。
「ですから」
「いいってのかい」
「はい、今夜お渡ししたいものがありますので」
「何度も断ったらかえって失礼だしな」
源五郎はここでこう考えたのでした。あまり断り続けるのもよくないと。こう考えたのです。
そしてです。彼の答えは。
「わかったさ。今夜だな」
「はい、今夜です」
「受け取らせてもらうな」
今度は気さくな笑顔での言葉でした。
「今夜な」

「楽しみに待っていて下さい」
「それじゃあ」
こんな話をして狐達に油揚げを渡した源五郎でした。彼はそれから道を引き返してまた油揚げを買いました。そして家に帰ってそのうえで女房のお通に話すのでした。
おっとりとした顔の気のよさそうな人です。その人が言うのでした。
「それはいいことしたね、御前さん」
「そう思うかい」
「その狐達が喜んでいたんだよね」
「ああそうさ」
源五郎はにこりと笑ってお通に話します。今二人の間にはその油揚げが入った包みがあります。それを囲みながらの話なのです。

第三章

「とてもな」
「ならいいんだよ。喜んでくれたらね」
「銭はいいのかい」
「金は天下の回りものじゃないかい」
お通がここで言った言葉はこれでした。
「だからね。いいんだよ」
「そうかい。じゃあ今日はな」
「この油揚げだね」
「食おうぜ」
楽しげな言葉でした。
「これからな」
「わかったよ、それじゃあね」
こうしてです。二人で油揚げを仲良く食べました。そのうえで二人枕を並べて寝ました。そしてその夜源五郎は夢の中で彼と会ったのです。
「もし」
「んっ！？」
「宜しいですか？」
こう彼を呼んできたのです。彼は夢の中で話しています。
「私です」
「ああ、あんたかい」
「はい、私です」
相手が誰かはもうわかっています。そのうえでのやり取りでした。
「私です、あの狐です」
「約束通り来てくれたんだな」
「約束は守らないといけませんから」
父親狐でした。こう彼に言ってきたのです。

「ですから」
「そうかい。律儀だねえ」
「有り難うございます。それでなのですが」
父親狐の言葉が恭しいものになりました。そうしてです。
彼の前にあるものを出してきました。それは。
「んっ、これは」
「お面です」
見れば狐のお面です。白いそこに狐の顔が描かれています。お髭もです。それを出してきたのです。
「狐のお面です」
「これに何かあるってのかい？」
「はい、これを被ればです」
「ああ」
「人であっても自由に変身することができます」
そうだというのです。
「何にでも。自由に変身できるのです」
「へえ、そりゃ凄いな」
源五郎はそれを聞いて面白そうな声をあげました。
「このお面を被ればそれだけでかい」
「はい。如何でしょうか」
お面を差し出したうえでの言葉でした。
「御礼にこれを」
「いや、それだけれどな」
しかしです。ここで源五郎の言葉が神妙なものになりました。
そのうえで、です。こう言ってきたのです。
「あのな」
「はい」
「贅沢を言うがな」
「何でしょうか」
「悪いがもう一つあるか？」

こう父親狐に対して言うのでした。
「もう一つな。あるか？」
「もう一つですか」
「一つだと俺は化けられるよな」
「はい」
「けれど俺だけだからな」
こう言うのです。
「俺だけだからな。女房はなれないからな」
「奥方もですか」
「俺だけ化けても駄目だよ。そんな楽しいことは俺だけ楽しんだら駄目だよ」
「奥方も」
「そうだよ、女房もな」
笑っての言葉でした。
「ちゃんと二人で一緒に化けないとな。女房にも悪いからな」
「成程、そこまで考えてましたか」
狐は彼のその言葉を静かに聞いていました。そして聞き終えてからです。こう彼に対して言ったのです。

第四章

「それならです」
「それなら？」
「どうぞ」
　この言葉と共にです。お面をもう一つ出してきました。そっくりそのまま同じお面を二つ並べてみせています。それを源五郎に差し出してきたのです。
「これでどうでしょうか」
「悪いな、何か」
「いえ、お面は幾らでもあります」
　数の問題ではないというのです。
「ただ」
「ただ？」
「その御心、見事です」
　感服する言葉でした。源五郎に対して。
「御自身だけでなく奥方のことまで考えておられるとは」
「まあな。一人だけ楽しむってのは人の道じゃないからな」
「それで私達にも油揚げをくれたのですね」
「だから言ってるじゃねえかよ。楽しみってのは皆で楽しむもんだってな」
　笑って話すのでした。
「そう思うからよ」
「そうですね。その御心に打たれました」
　狐は実際に感銘した顔です。その顔での言葉でした。
「ですから。どうぞ」
「有り難うな」
「いえいえ、御礼を申し上げるのはこちらです」
「あんただってのかい」

「油揚げを頂いただけでなくいいことを教えてもらいました」
だからだというのです。その言葉は実に真摯なものでした。
「ですから」
「そうかい、じゃあ有り難くな」
「はい、どうぞ」
こうして狐からそのお面を二つ頂きました。そして朝になるとです。
枕元に並べられて置かれているそのお面を手に取ってです。そのうえでお通に対して夢のことを話すのでした。
「それでだ、御前もだよ」
「あら、私もなのかい」
「ああ、一緒に化けようぜ」
笑ってこう話すのでした。
「蛙にでも鼠にでも何でもな」
「どっちも蛇に食われるからいいよ」
「ははは、じゃあ犬にでもなるか」
「そうだね。それか猫にでもね」
「一緒にな」
また一緒にと言うのでした。
「化けるぜ。いいな」
「ええ、一緒にね」
「一緒に楽しまないと本当の楽しみじゃねえんだよ」
女房に対してもこのことを言います。
「だからな。それでいいな」
「そんなあんただから一緒にいるんだよ」
これがお通の言葉でした。
「あんただからだよ」
「俺だからかい」
「その心、忘れるんじゃないよ」
そしてこうも言うのでした。

「絶対にね。いいね」
「ああ、わかったさ」
源五郎もです。女房のその言葉に笑顔で応えます。そうしてです。
女房にそのお面を手渡してです。そして化けるのは。
「じゃあまずはこれにな」
「そうだね、これにね」
二人が化けたのは狐でした。それぞれ黒と白の狐になったのです。
そしてその狐の姿で、です。二人で仲良く話すのでした。
「お面をくれた狐にな」
「ならないとね」
狐を立てることも忘れないのでした。源五郎は何処までも他の人と一緒に楽しむことを考えお通はそんな亭主が大好きでした。そんな二人は末永く一緒に、他の人や動物達と共に楽しむのでした。

狐のお面　　完

2010・5・6

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5419n/

狐のお面

2010年10月8日14時02分発行